

日頃は各自職業を持ちながら、いざというとき、災害から市民を守る日本の伝統的なボランティア団体「消防団」。台風などの浸水地域の救助活動や、沿岸などでの水難事故発生時の救助活動を強化するために、宮崎市消防団に「水上バイク隊」が正式運用された。機能別消防団員としては全国初の試みである。



6月3日付けで正式に発足した宮崎市消防団「水上バイク隊」のみなさん。水上バイク隊の文字が書かれたライフジャケットとヘルメットが勇ましい。女性隊員も含め、15名の皆さんの活躍が期待されている。

宮崎市消防団に 全国初の「水上バイク隊」が誕生！



訓練および救助作業中は、宮崎市消防団水上バイク隊の文字が入ったライフジャケットとヘルメットを着用。



訓練風景：消防団の指示を受けて、浸水地域に取り残された人を救助するために出動。



訓練風景：対岸に救助者を見発。後部シートに乗せて安全な場所まで運ぶ。

松地区を案内していただきながら救助活動の模様を振り返っていただいた。

日高さん達4人はトレーラーに3人乗りのジェットを積んで大淀川に架かる宮崎大橋に車を止めて、傾斜がある道路をスロープ代わりにジェットを水面に降ろし、救助に向かった。「とにかく色々な物が流れているんです。ジェットポンプに異物を吸い込まないように水面をよく見ながら走りました。住宅地を回り、取り残されている人を1度に2人乗せ、安全な場所までピストン輸送。消防の人もゴムボートで救助しようとしてましたが、尖った漂流物に当たりゴムが裂けて断念。手こぎボートではスピードが遅いし、水が濁っていて実際の水深がわからないから船外機付きのボートも使えない。こういう時は、ジェットが最大限に役に立つんだとあらためて感じました。ある場所で、ハルに何かが当たったんです。よく見ると車の

屋根。駐車場だったんです。船外機付きのボートだったら、一発で壊れてしまったね。また、増水する時間が速くて、鎖に繋がれたまま浮いている犬を何匹も見て本当にかわいそうでした」

午後6時過ぎに浸水家屋に取り残された人たち約90名を迅速に安全な場所に避難させた後は、1階部分が完全に水没した同地区にある記念病院に医療器具や飲料水、ドクターなども運んだ。全ての救助活動を終了したのは夜の9時30分を過ぎていた。献身的な働きをする今回の水難救助を目の当たりにして、宮崎市の人たちは、浸水時の救助活動における水上バイクの機動力の高さを再認識したようだ。

6月3日付けで、15名の水上バイク隊が誕生

平成17年の台風14号の浸水被害を経験し、宮崎市消防局ではさらなる救助体制の強化の必要性を考

平成17年の台風14号で浸水した宮崎市小松地区

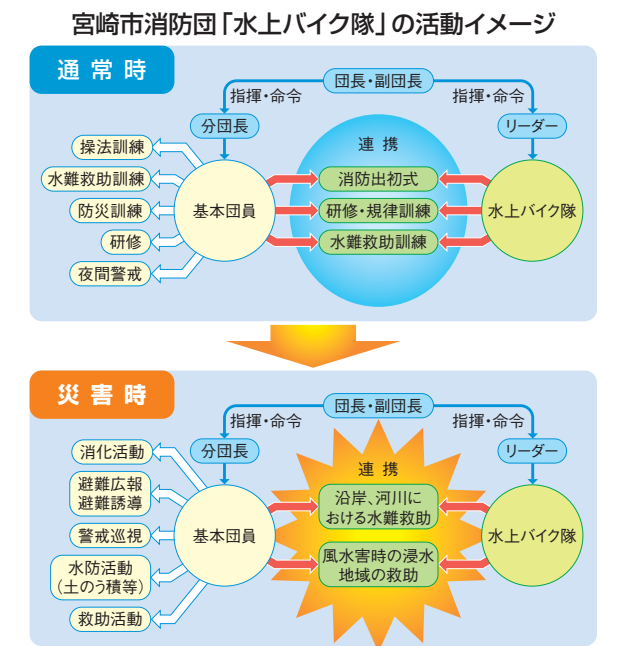
実際に救助を行った日高さんが、携帯電話のカメラで撮影した当時の浸水地域の写真。たった4人で、浸水地域に取り残された90名を救助した。

えた。一般のユーザーの水上バイクが河川で水難事故の救助に協力した事例はたくさんあるが、基本的にはボランティアで、使った燃料代はもちろん、救助のためにPWCが何かにつかり壊れたとしても自己負担である。極端な話、2次災害で救助に向かったPWCユーザーが怪我をしたり死亡したとしても何の補償もない。「何とかできるものだろうか」。PWCを公的な働きのために効率的に活動してもらおうことを考えた結果、宮崎市消防団内に機能別消防団員として「水上バイク隊」を発足させた。機能別消防団員とは基本団員(通常の火災等の消防活動を行う消防団員)と異なり、ある特定の活動や大規模災害時に活動を限定して参加する消防団員のこと。団員の得意分野に特化して活動できるといふ特徴がある。つまり、普段は一般の水上バイク愛好者だが、災害発生時は消防団の指揮のもと、自分のジェットを使い沿岸、河川における水難救助をしたり、風水害時の浸水地域の救助活動にあたる。全国各地で水上バイクで人命救助をした事例はたくさんあるが、機能別消防団員として正式に発足する「水上バイク隊」は全国でも初めて。機動力が高く、実際の浸水時の救助活動で本場に役に立つことが実証された。「水上バイク隊」は尾崎正孝さんをリーダーに、計15名の団員で構成。水上バイク、ウエットスーツ等のライディングギアは個人のものを使用。救助活動のためのライフジャケットとヘルメットが貸与される。消防局または消防団の要請で出動した場合、出動手当が公費から支給され、救助にかかった燃料代や救助活動によって破損したり故障した場合の修理費用も公費で負担されることになった。救助活動中の事故により負傷した場合

浸水地域での救助活動に大活躍

宮崎市消防団に「水上バイク隊」構想が持ち上がったのは、平成17年9月4日から6日にかけて九州地区に甚大な被害をもたらした台風14号の浸水被害時に、PWCが大いに活躍したことが挙げられる。台風14号の通過に伴い、宮崎県では雨量の多いところで1,000mmを超える記録的な大雨となった。この大雨の影響で県内を流れる大淀川をはじめとする主要河川とその支流が洪水となり、多くの地域で浸水被害が発生。

被害の大きかった宮崎市小松地区では、9月6日の午前中に大淀川支流の大谷川が本流との合流部付近で氾濫が始まり、またたく間に浸水が進行。午後1時過ぎには浸水の深さが約3メートルにまで達した。住宅の1階部分は完全に水没。大淀川下流域一帯には氾濫の前に避難指示が出たため人的な被害はなかったが、多くの人が



は、基本団員と同じ公務災害扱いとなる。

通常時は消防局・消防団と連携し、水難救助訓練などに参加。規律訓練や研修なども予定されている。

平成17年の台風14号のような大規模災害は頻りに起るものではないが、地球温暖化等により今後は今までは考えられなかった災害が起きることも否めない。各自自治体も危機管理を真剣に考えるようになり、災害発生時に少しでも被害を軽減できるよう、様々な活動モデル事業を展開しているようだ。今回、宮崎市消防団に「水上バイク隊」が発足したことに、全国の自治体から注目を集めるだろう。

6月3日(日)、宮崎市役所裏の大淀川で、宮崎市消防団「水上バイク隊」の発足式が行われた。15名の隊員1人1人に宮崎市消防団長から辞令が交付。

「水上バイク隊を歓迎します。宮崎の消防団は、『自らの郷土は自らで守る』という強い郷土愛精神のもとに活動を行っています。水

上バイク隊のみなさんも我々の精神をご理解いただき、災害時は力を合わせて救助にあたっていただきたいと思えます」、宮崎市消防団長の尾中代博さんが訓示。

発足式の後は、宮崎市消防局、宮崎市消防団合同で水難救助訓練が行われた。

「時には海の暴走族と言われ悪いイメージを持たれることもある水上バイクですが、『水上バイク隊』の活動を通して、水難事故や災害時の救助にも役立つ機動力の高い乗り物として社会的に認知されるようになれば良いと思います」と、初代リーダーの尾崎さんは語る。



辞令の交付を受けるリーダーの尾崎さん。



宮崎市消防団の訓示を受ける水上バイク隊のみなさん。